

秋田県横手市教育委員会

「言語活動の充実」による 授業改善

～言葉の力が一人一人の学びの質を変える～

はじめに

本市は、県南部に位置する人口8万6千人あまりの秋田県第2の都市である。平成17年に1市7町村が合併し、現在の横手市となった。当時は合わせて36校あった小・中学校も、横手市学校統合推進計画により、今春最後の小学校統合をもって、統合整備事業は終了。児童生徒数は約5500人、14小・6中学校計20校という現在の形が整った。合併当初は当然のことながら、それまで各市町村で行われていた教育の重点や施策は異なっており、そこで育った児童生徒の持てる力や状況も様々であった。横手市という一つの自治体となったところで、この実態の差異や格差を平準化し、さらなる学力の向上を図っていくために、教育行政として何をどう進めていくべきか、非常に大きな課題であった。時は「言語活動の充実」という新たな教育の基軸が示された平成23年度からの学習指導要領全面実施を控える大きな節目と重なっていた。横手市の全ての学校の全ての児童生徒に確かな学力を育成するため、学校・教職員・行政一体となって推し進めてきた取組を紹介したい。

1. 「言語活動の充実」の本質を捉えて

学習指導要領改訂に伴う移行措置期間スタートとなる平成21年度。本市において「言語活動の充実に係る研究指定事業」を立ち上げた。改訂の柱である「言語活動の充実」とは一体どんなことであるのか。全教職員が共通に理解すること、お互いの実践の成果と課題を共有しながら、授業改善を積み重ねていくことは、全市一体の方向性を明

確にし、豊かで確かな学びを保障する学校教育のために必要不可欠であると考えたからである。

I期（H21～H23）の研究指定事業「言語活動の充実を中核に据えた学校教育課程の改善・指導方法の工夫に関する研究」は、2年間の指定を受けた研究推進校が自校の研究主題に基づく実践研究を行い、指定2年次目に全市公開研究会を開催することとした。公開研究会当日は、市内全小・中学校を休業日とし、全ての教職員がいずれかの公開校の授業参観・分科会に参加することとなっている。例えば小規模な中学校であると、教科担当が一人ないしは二人という現状から、授業改善についての検討や意見交流が十分にはできないという実情がある。年に一度、このように市内の全教職員が一堂に会し、授業や各校の取組を踏まえた課題等について協議ができるという機会は、大変に貴重で有意義である。同じ市内の学校同士、「言語活動の充実」を核としながら授業改善を図るという共通の目的をもった研究実践であるからこそ、自校の取組と重ね合わせながら見て、考えを深めることもできる。

同じくI期（H24～H26）は「言語活動の充実による学力向上推進事業」と事業名をリニューアル、「言語活動の充実による確かな学力の育成」を研究主題として、さらに全市一体の授業改善を進めた。年度を重ねるごとに、研究会に参加する教職員は、公開校の成果と課題を共有したいという意欲を高めていった。自校の実践にそれらを生かし、さらなる授業改善を進めていくという、市全体の大きな研究のスパイラルがそこに生まれてきたのである。

さて、それでは実際の授業はどうであったか。確かに、児童生徒の発表の機会は増えた。以前は、特定の、ほんの数人の発言を取り上げて教師がうまくまとめ、授業を進めていくスタイルが主であったが、多くの子供が自分の意見や感想

を話す場面が多くなっていった。また、グループでの話し合いや全体での交流も授業の中に位置付けられるようになり、子供同士の関わり合いの中で課題解決が図られる授業に変わってきた。しかし、これが真の「言語活動の充実」と言えるのか。多くの子供たちが発表はしているが、お互いの考えが有機的に結び付いているとは言えない。話し合っているが、新たな気付きや考えの深化に至ってはいない。最終的に授業のゴールには、教師が準備したまとめが据えられている。真の授業改善を目指すためには「言語活動の充実」の本質とは何かを捉え直し、どの教室も子供たちの良質な思考でいっぱいになるような手立てを講じる必要があった。

2. 言語活動の質を高めるものは言葉の力

I期の研究で浮き彫りになった課題を解決すべく、継続してH27からII期目の研究指定事業に取り組むこととした。

子供たちの発言が表出されただけでは言語活動の充実とは言えない。個々の考えや思いが表現されるまでの過程において、また、それぞれの考えや気付きが話し合いの中で有機的に結び付いていく過程において、どれだけの思考が働いているかが問題であると認識した。子供一人一人がどれだけ「考えて」いるか。「言語活動の充実」という手段は、思考力、判断力、表現力等を育成するためにあるものだからである。「話す」ことだけではない。「読む」こと、「聞く」こと、さらには「書く」ことも思考を伴う言語活動であると捉え直す必要があった。

授業を構築する上で、教師側がそのことを意識して、価値ある課題を設定したり、共通の問題意識を高める工夫をしたり、学びのコーディネート力を高めることに注力したりと、新たな授業改善の展開が期待された。しかし、最も重要なのは、子供一人一人の思考の質なのである。私たち人間が「考える」という行為をするとき、頭の中では言葉を操作して論理を組み立てたり、表出する内容を整理したりしていくことになる。教師の指導力を何とかするだけでは、真の思考力、判断力、表現力等は育成できないのではないかと、思考の質の高まり・深まりは実現できないのではないかと、実は、子供一人一人に内在する言葉の力を高め、豊かにすることこそ今必要なのではないかと考え、次の3つを全小・中学校の共通実践項目として設定し、研究推進を図ることとした。

(1) 学校図書館の有効利活用と読書活動の推進

子供たちに必要な言葉の力。それは語彙であったり表現力であったり、また言葉から多様なイメージを広げていく想像力であったり…。そういった言葉の力を自在に運用・活用できたならば、豊かな思考・表現、コミュニケーションが生まれてくるに違いない。語彙や表現の乏しい子供は、思いの芽はあっても広がらない、深まらない。何よりも発信できないのである。どの子供ものびのびと自由に豊かな言葉で考え、表現できるようにしていきたいと願い、学校図書館と読書活動をメインに据えた。

まずはじめに、学校図書館の改革に取り組んだ。子供たちが喜んで足を運び、本を手に取り、読書を楽しむことのできる大好きな場所となるよう手立てを講じることとした。

①いつも誰かがいてくれる学校図書館

一昔前の学校図書館というと、普段はあまり人がおらず、昼休みや放課後など決まった時間に図書委員会の当番がいて、貸し出しや返却のやり取りをする、そのような印象である。そんな雰囲気と使い方をガラリと変えるためにも、まずは人が必要である。本市では、会計年度任用職員として学校司書を13名雇用している。20校それぞれに一人ずつ配置することは叶わないが、兼務を掛けながら、全ての小・中学校に配置している。学校司書がいることで、学校図書館という空間に温かみと安心感が生まれた。子供たちはそれを自然に感じ取っているかのように、朝登校してすぐに、また、昼休み時間に、嬉しそうに図書館にやってきてお気に入りの場所に座って本を読んだり、読みたい本を借りたりするようになった。学校司書のアイデアも各校の図書館を個性的に彩り、市内小・中学校の図書館ツアーを楽しめるほどに充実している。



②読書活動の充実を支えるスタッフの取組

子供たちの読書活動を推進し、「言語活動の充実による確かな学力の育成」に資する学校図書館を目指し、学校司書、教職員、市立図書館司書の三者が参加する市教委主催の合同研修会も、平成23年度から継続して実施している。選書や配架、レファレンス、ブックトーク等に関する研修から、読書センター、学習センターとして機能する図書館づくりについての選択テーマに基づく研修まで、幅広く知識と実践事例を吸収してもらうよう企画・開催してきた。こういった図書館を運営する人的サポート力をアップさせるにつれて、子供たちの読書への関心・意欲も高まり、本の貸し出し・読書冊数も次第に伸びていった。

一方で一つ大きな課題があった。それは、中学生の不読率の高さである。横手市子供読書活動推進計画（H26～H30）策定に当たり、市内小学校4年生と中学校2年生を対象に読書についてのアンケートを実施した。その結果、中学生においては1ヶ月に読む本の冊数もごくわずか、学校にいる時以外ほとんど本を読まない実態が見えてきた。もちろん、小学生に比して勉強や部活動等で忙しくなるわけではあるが、主な理由として挙げられていたのは「TVやゲーム、雑誌やまん画の方が面白い」「読みたい本がない」ということであった。小・中連携して9年間を見通しながら言葉の力を高めていこうとしているところであり、この課題は何とかして解決しなければならなかった。

そこで、取り組んだのは『中学生が中学生に勧めたいおすすめの本100選』の作成である。等身大の感じ方や読み方で自分たちに勧めてくれる「とっておきの一冊」ならば、読書に関心の薄い生徒でも少しは興味を持って、本を手にとってくれるのではないかという思いからである。この100選、市内全中学生からの推薦文付きアンケートをもとに、各校図書館担当教員、学校司書、市立図書館司書が協働で、分類・集計・選書協議などを4ヶ月余りかけて仕上げた。その後、ポスターにして市内小・中学校はもちろん、公共施設、病院、大型商業施設など多くの市民の目にも触れる場所に掲示。それを見て、孫や子供のためにと、大人が本を買いに来ることもあったそうである。取組の成果をR29実施の同アンケート結果の推移で見ると、1ヶ月に3冊以上本を読む生徒の割合はH24からH29で11%上昇、不読率は8%減少している。また、平成29年度全国学力・学習状況調査によると、全国及び秋田県では、中学生になると「読書が好き」という割合が減少している

が、横手市においては上昇しているという結果が得られている。このことから、普段の学校図書館運営の充実や「おすすめの本100選」などの手立ての工夫により、小・中学生ともに読書活動が推進されていると捉えられる。



(2) NIEの推進

確かな学力のベースとなる言葉の力を鍛えるために、教科学習にかかわらず、日常、また学校生活において新聞を活用した教育活動を共通実践事項とした。新聞は整った文章・文体で書かれ、新鮮で豊富な情報に触れることができ、社会につながる「窓」とも言える。スマホ等の利用による活字離れ、新聞を読む機会の減少など、思考力、判断力、社会性の未発達などが危惧される社会的な背景の影響は、本市の児童生徒の実態にも表れており、全市で取り組むべく重要な実践事項と捉えている。

現在も継続して、市内全ての小・中学生に、小学1～4年生にはこども新聞、5・6年生には中高生新聞、中学生には一般紙を、市の予算で年8回配付している。また、毎週金曜日を市内小・中学校一斉に新聞を活用した教育活動に取り組む「新聞の日」と設定。授業のねらいに応じて効果的な新聞の活用を図り、それらの実践事例は、教職員ネットワークの共有フォルダへの保存を呼びかけ、いつでも誰でも参考にすることができるようにしている。

興味のある新聞記事について、自分なりの感想や考えをまとめて掲示したり、そのことについて話し合いをしたりすること。道徳や国語など、テーマや課題に対する多様な考えをもったり深めたりするために、関連する新聞記事を読むこと。単元の導入で、興味・関心を高めたり、課題意識をもたせたりするための手立てとして効果的な新聞記事を提示することなど。学年、各教科等に応じた多くの実践例が蓄積されている。各校の校内環境にも、新聞を活用した掲示

物が数多く見られ、中には、校長プロデュースのコーナーなどもあり、子供たちも興味をもって読んでいます。新聞を学校教育の中に取り入れることで、根拠をもとにして自分の考えをもつ、形成していくことが鍛えられていった。さらに、自然に問題意識をもつようになった子供たちは、どの教科でも「目の付けどころ」が変わり、発言内容も多彩になった。友達の多様な意見・考えに触れることで、初めて、悩み、考えを深めることができる。発表するだけに止まりがちであった教室での学び合い・交流に、化学変化が生まれ、有機的な考えの結び付きを実感できるようになってきた。



(3) 小・中連携による継続的・計画的な指導

学習指導要領は小学校・中学校、別々に示されているものだが、その理念は共通であり接続されている。子供の成長に切れ目などはなく、連続する滑らかな時の流れの中で、一人一人が「その子らしさ」を輝かせながら、様々な経験や学習を通して今日よりも明日、よりよい自分に変容していくのである。小学校・中学校の垣根を低くし、9年間を見通して、同一中学校区において育てたい児童生徒の資質・能力を明確にすること、お互いの校種でどのように授業改善がなされ、子供の実態はどうであるのか共有し、接続を意識した協働研究に取り組むこと。このことを共通実践項目に据えることで、市内の小・中学校の教員同士の授業研究・相互交流が当たり前の風景になった。その結果、教員に児童生徒の姿を連続したものとして捉える見方が備わり、より実態に即した授業改善が行われるようになった。これは、様々な能力・個性を有する全ての子供たちにとって、嬉しい教育ベースではないかと考える。

おわりに

「言葉の力」を核とする市独自の研究指定事業を通し、全市一枚岩となって言語活動の充実による授業改善に取り組んできた。確実に「このことを」「みんなで」の精神で、学校・行政、家庭・地域も皆巻き込んで10年余り。今ではどの学校でも、自らの内に蓄えた言葉の力を生かし、深く考え豊かに表現する子供たちの姿が見られるようになった。今年度から、一人一台端末が配付され、高速のwi-fi環境の中で手軽に情報にアクセスし、友達の考えもリアルタイムで把握できるようになった。豊かな情報の獲得と精緻な情報発信も可能になり、「協働」と「発信」の新たなスタイルを手に入れることができるようになったとも言える。義務教育9年間でしっかりと言語能力を身に付けながら、それらを生かして質の高い思考・考えの形成を行うこと、さらにICT活用手段もプラスしながら、広く多様な情報を受信し、多様な相手に多様な形で発信していくことのできる児童生徒を育てていくこと。それが本市教育の目指す次の未来予想図『言葉×ICT』の形である。

